

中世編の編さんに関係して

専門委員 柴 辻 俊 六

十余年の歳月をかけた『甲府市史』の編さん事業が今終ろうとしている。当初から関係させていただいたものの一人として感慨深いものがある。

私が担当させていただいたのは、中世編のしかも後期である戦国期の、しかもその一部分であったが、終ってみてその結果を顧みると、最初の五年間は基礎調査のために市内の見学や関連文書の实地踏査が多くあり、それまで地理概念や史料所在の把握が曖昧であったが、何とか最小限度の市内概況を掴むことができた。しかし今考えてみると、この实地踏査も大変に局地的なものであって、すでに良く知られているものの確認調査が多く、全く未知の新しいものの発掘という点では、努力不足であり、もう少し別の方法がなかったかと反省している。

最初に具体的な形としてまとめさせていただいたのが『甲府市史料目録』（甲斐武田氏文書目録）であって、これはそれまでに明治大学の高島緑雄氏とともに進めていた武田氏発給文書の所在調査の結果を目録化していただいたものである。武田家臣団のものも含めて総数三二八〇点の概要を目録化したのであるが、反響はかなり大きく、その後、追加や訂正をいただいたものが一割強に及んでおり、まだまだ武田氏関連文書発掘の可能性の高いことが確認された。ついで『史料編』第一巻として戦国期約一〇〇年間に担当させていただき、前述した武田氏関係文書を中心に、甲府に関係したものを編年順に配列し、若干の解説を加えた。この方は、先年亡くなら

れた専門委員の中沢信吉氏のご協力を得て、関係する記録や金石銘文も加えることができ、県内での編年史料集としてはかなりの成果を収めたもののとの自負を抱いている。とはいえ見落しや無年号文書の年代推定の誤りも若干残ってしまい、この種の作業の限界も種々感じたことが多い。

『通史編』第一巻は、関係者多数の分担執筆であったが、私は戦国期武田氏の領国経営の部分を分担させていただいた。目次の立て方から試行錯誤し、結果として史料編に多見する事項を項目立てしたが、他氏執筆分との調整が不充分で、重複した記述と不足した項目が目につき、通史叙述のむずかしさを痛感した。この間、『市史だより』や『甲府市史研究』に小文を書かせていただいたが、本誌に多少とも反映させることができた点はよかったと思っている。

最後の仕事が通史ダイジェスト版の執筆であったが、これも思いの外にむずかしい作業であり、先行する『史料編』『通史編』の成果を取り込みながら、かつ読み易く面白く、しかも高度な内容を保つといった編さん目標をどれほど達成できたのか大変に不安に思っている。

（市史編さんを終えて）

専門委員 田 代 孝

考古学の分野から市史に関わらせていただいてから、早十年が経つ。この間、土器遺跡、一の森経塚遺跡、川田館跡、湯村山城跡などの発掘調査が印象に残っている。

とくに、発掘作業に熱心に参加していただいた方々、協力的であつ